

部落史の窓(8)

ボリス・ゴルバトフの

「穢多」

渡辺俊雄

『日本新聞』
 思いもよらなかつたところに部落問題
 が顔を出す。部落史を追いかけていて、
 時々経験するところである。

一九四五年八月、日本が一五年にわた
 る戦争に敗北し、アジア大陸の奥地で「棄
 民」となった多くの日本人は、あるいは
 日本への必死の帰還をめざし、あるいは
 ソ連軍の捕虜となってシベリアに抑留さ
 れた。このシベリア抑留に関しては、恨
 みつらみが染み込んだ数多くの手記や回
 想が活字にされてきた。しかし日本人は、
 この事実を本当の歴史として総括してい
 ないのかも知れない。シベリア抑留の全

体像については、とりあえずウイリア
 ム・ニンモ著『検証—シベリア抑留』(時
 事通信社、一九九一年)で知ることがで
 きるが、同書の「ソ連占領地域で日本人
 が受けた仕打ちは、日本の軍隊が中国や
 その他のアジア各地でやった行為と決し
 て別物ではない」という指摘は重い。

このシベリアの捕虜収容所で『日本新
 聞』という、日本語の新聞が日本人によ
 って発行されていた。近年、朝日新聞社
 から復刻されて、手近に読めるようにな
 った。

その『日本新聞』で部落問題の記事を
 読み、日本へ帰ったら部落史の研究をし
 ようと思ったという話が、小林茂先生の

お話に載っている(『研究所通信』一九九
 二年七月)。以前からこのお話を聞いて気
 にはしていたのだが、同紙が復刻された
 のを機会に調べてみると、その数はけっ
 こう多い。部落問題を扱ったものに、次
 のような記事がある。

- 45・11・17 〈日本社会党結成〉
- 46・8・1 「民主日本建設の為に(四)
- 46・10・15 「特殊部落とは何か」
 社会的改革のための要求」
 諸戸文夫

- 46・11・30 「穢多(一)」B・ゴルバトフ
- 46・12・7 「穢多(二)」
- 46・12・10 「穢多(三)」
- 46・12・12 「穢多(四)」
- 46・12・14 「穢多(五)」
- 46・12・17 「穢多(六)」
- 47・7・29 〈日本帝国主義侵略史(七)〉
 「天皇にあう必要なし—」
 謁」を断った松本参議院副議
 長」
- 48・2・10
- 48・12・11 〈時事解説／血塗った暴力と
 弾圧に抗して〉
- 48・12・18 〈民主主義擁護同盟うまる〉

49・8・31「京都「特殊部落」をゆく(一)」「
 49・9・3「京都「特殊部落」をゆく(二)」
 〆〆印は、部落問題について文中で
 言及したものである

浅原正基

なぜ、シベリアの捕虜収容所で部落問
 題が多く語られたのか。

当時、日本人の抑留者を代表して実際
 に『日本新聞』の編集に当たっていたのが、
 浅原正基氏で、「諸戸文夫」はそのペンネ
 ームである。浅原氏の名前は、近年まで
 『世界経済と国際関係』という季刊雑誌
 を編集されていたことで、承知の方も多
 いだろう。その浅原氏が『日本新聞』を
 含めてみずからのシベリア抑留の体験を
 総括した本が『苦悩のなかをゆく』(朝日
 新聞社、一九九一年)として出ている。
 浅原氏にお尋ねしたところ、次のよう
 なお話を聞くことができた。

「当時は、すなわち一九四六(昭和二
 一)年当時は、捕虜軍隊のなかで軍国主
 義の勢力は強じんで、イデオロギー的に

も、文字どおりの意味で肉体的にも、差
 別とテロルが荒れ狂っていました。反
 戦・反軍の闘争を兵士大衆のなかに浸透
 させるには、なによりもまず、さし迫っ
 て天皇制支配の本質を暴き出すことが必
 要でした。これは、今日からみれば過ぎ
 去った過去の歴史になりましたが、旧帝
 国主義軍隊のなかではすさまじい論議と
 闘争の対象であったのです。その関連で
 部落問題がとりあげられたと思うのです
 が、部落の存在を知らなかった(または
 漠然としか知らなかった)勤労者兵士に
 はまことに大きな衝撃でした。」

小林先生もこうした雰囲気の中で生
 活してきたのである。

なお、浅原氏の著書の中には、後に部
 落解放同盟東京連合会の委員長になっ
 た高山秀夫の話がしばしば登場する。高
 山は、やはりシベリアでの民主運動の活
 発な活動家であった。

ボリス・ゴルバトフ

さて、『日本新聞』の記事の中でも注目
 を引くのが、ボリス・ゴルバトフという

【新潮世界文学辞典】によれば、ゴル
 バトフの略歴は以下の通りである。

ゴルバトフ、ボリス・レオンチェビツ
 チ Борис Л. Горьбатов
 (1908—54)ソ連の作家。ドンパスに生
 れ、職工として働く。二二年より創作を
 はじめ、中編『党細胞』(28)、長編『わ
 が世代』(33)とその統編『アレクセイ・
 ガイダシ』(55)を書く。ドイツ軍に対す
 るドンパスの民衆の抵抗を描いた小説
 『降伏なき民』(43)は、第二次大戦中の
 抵抗文学の代表作の一つである。(章鹿外
 吉)

3・Я・ハーニン

だがしかし、どうしてソ連の作家が部
 落問題のルポを書き、それが『日本新聞』
 に載ったのか。

その疑問に答えてくれたのが、昨年初
 めて来日された3・Я・ハーニンさんだ
 った。ハーニンさんは旧ソ連でただ一人
 と言つていい部落問題の研究者で、戦前
 の水平社運動に関する論文・著作もある。
 長く来日を楽しみにされていたが、よう

やくソ連崩壊後、アメリカ合州国に住ま
 れるようになってから、夢が実現した。

ハーニンさんにはぜひゴルバトフにつ
 いてお尋ねしようと思つていた矢先、同
 氏を囲む研究会の報告のなかで、ハーニ
 ンさんのほうからその名前が出たのに驚
 いた。一九五三年にゴルバトフその人が
 「部落出身の男」と題する本を書き、そ
 れはソ連における部落問題研究の歴史の
 上で画期的な文献だという高い評価であ
 った。

研究会での報告の要旨は『部落解放研
 究』の八八号と八九号に掲載されている。
 その後にハーニンさんから手紙で教えて
 いただいたこと、先の報告内容で訂正す
 べきことだけを簡単に紹介しておく。

ゴルバトフが来日したのは一九四五年
 の秋で、翌年の春まで日本に滞在した。
 目的は敗戦後の日本を視察することであ
 る。いうまでもなくソ連は、当時日本を
 占領していた連合国軍の構成国の一つで
 あった。この時に来日したのは四名であ
 った。報告では三名とあるが、その後ハ
 ーニンさんから四名であったと訂正の連

ソ連の作家によるルポの連載「穢多」で
 ある。四百字詰め原稿用紙で、約四〇枚
 にのぼる。

内容の要旨は、天皇直訴事件で有名な
 北原泰作の半生を紹介しながら、部落差
 別の悲惨さと解放運動の必要性を訴えて
 いる。部落民は「勤労大衆の共同闘争に
 その全力を捧げねばならない」「全世界の
 勤労大衆と共に手を握って人類の権利の
 ために闘おうと決意した」という結論は、
 明らかに部落解放運動を階級闘争の一翼
 として位置づけようとする階級的な立場
 に立っている。たんに階級的であるばか
 りではなく、北原の「日本の労働者農民
 は穢多階級よりもつとひどい生活をし
 てるるではありませんか」という発言を
 書き留めている。当時、北原は日本共産
 党員として党大会でも部落問題に関して
 発言していた。だからルポの内容は、当
 時の党の路線とみごとに合致している。

また合致してるからこそ、シベリアでの
 民主運動のいわば機関紙である『日本新
 聞』に掲載する意味があったし、掲載が
 許されたであろうことは、疑いが無い。

絡があった(もう一人の人物は、オレグ・
 クルガーニンという)。

帰国後四人は、それぞれ日本に関する
 報告を書いた。ゴルバトフのルポ「穢多」
 もその一部であろうが、ロシア語での公
 表は、ハーニンさんによれば一九五三年
 である。この時には、このルポだけ独立
 した本としても発表され、あわせて日本
 旅行の印象を記した他のエッセイを含ん
 だ本の一部としても発表されたという。

そのロシア語のテキストをまだ読んで
 いない。もとより翻訳されて『日本新聞』
 に発表されるに際して日本人の読者向け
 に多少の加除があった可能性もあるし、
 一九五三年にロシア語で発表する際に旧
 来の原稿を添削した可能性もある。同じ
 テーマであるが、新たに書き直した可能
 性も否定はできない。しかし、ハーニン
 さんが記憶する内容と『日本新聞』に掲
 載された文章の内容とは一致するから、
 ほぼ同一内容の作品であろうと考えられ
 る。

とすれば、そのルポは一九四六年には
 すでに書かれていたことになる。

ユダヤ人差別への 警告だったのか

この作品がどのような経過で『日本新聞』に掲載されるに至ったのか、浅原氏の記憶は今となっては定かではない。掲載の前後にゴルバトフ自身が『日本新聞』編集長だったコワレンコを訪ねてきて浅原氏も同席して懇談した記憶があるとおっしゃるが、確かではないとも言われる。ゴルバトフ自身が原稿を持ち込んだのか、どこかに掲載されていたのを編集者の誰かが注目したのか、不明である。

またハーニンさんの言われるのが事実だとすると、どうしてこの作品は書かれたときにロシア語で発表されなかったのか。

ロシア語で公表された一九五三年は、ゴルバトフが死亡した一九五四年の一年前だった。ハーニンさんは、この文章にはもう一つの狙いがこめられていたという。自身ユダヤ人であったゴルバトフは、迫りくるユダヤ人差別の強化に警告を発してこの文章を書き、発表したのだと断

言される。

はたして、どうか。やや深読みにすぎないかという危惧もある。

たしかにルポ「機多」には階級闘争との連帯を強調する部分と同時に、「今や彼は「機多」を助けるものは機多自身の外にないといふことを知った」という、自主解放の強調も見られる。そのどちらをゴルバトフは強調したかったのか。

解放委員会結成に 立ち合った可能性

いずれにせよ、このルポ「機多」が戦後のある時期、日本の民衆に一定の影響を与えたことは疑いない。また、旧ソ連における部落問題研究のうえで画期的な文献であることも事実であろう。

ところでゴルバトフは、一九四六年に京都で開催された部落解放運動のある集會に参加している。「機多」の冒頭は、次のような一文で始まっている。「私は京都で面白い会合、つまり「機多」階級代表者達の集會に出席することができた」。この集會とは、いったい何のことなのか。

『日本新聞』の連載の二回目末尾に掲載されている筆者ゴルバトフの紹介によれば、「今夏」つまり一九四六年の夏に日本へ行ったことになるが、もし手紙によるハーニンさんの指摘が正確であれば、ゴルバトフが日本を訪れたのは一九四五年秋から四六年春にかけてである。とすれば、京都の集會とは、一九四六年二月に開催され部落解放全国委員会の結成集會となった全国部落代表者会議、部落解放人民大会だった可能性も出てくる。しかし、これまでの解放運動側の当事者の資料には、当日外国人が傍聴していたという記録はなかったように思う。

謎は深まり、疑問は膨らむ。